

平成23年(ワ)第886号 浜岡原子力発電所運転終了・廃止等請求事件

原告 石垣清水 外33名

被告 中部電力株式会社

### 証拠説明書 5

静岡地方裁判所 民事2部合議係 御中

平成26年2月6日  
原告ら訴訟代理人を兼ねる

弁護士 鈴木 敏 弘

弁護士 河 合 弘 之

弁護士 青 山 雅 幸

弁護士 大 石 康 智

弁護士 南 條 潤

外

甲B号証	表題	作成者	発行年月	原本/写しの別	頁	項目	立証要旨	立証趣旨	備考
41	『科学』平成21年2月号 「活断層調査において変動地形学的手法がなぜ重要か」	中田高	平21・2・1	写し		地震		活断層を認定する作業は、多くの場合、空中写真判読をもとに地形の成因と発達史を明らかにした上で、それを根拠に論理的思考に基づいてなされる。これを変動地形学的手法という。原子力発電所設置などの際に地質調査マニュアルとして利用されてきた報告書(土木学会原子力土木員会)にあるリニアメント判読基準では、地形の直線性や新鮮さが過度に強調され、変動地形への本質的理解が欠落している。	
42	『科学』平成24年6月号 「地震の予測と対策:「想定」をどのように活かすのか」	島崎邦彦他2名	平24・6・1	写し		地震		地震波から解析されるアスペリティの位置は、本当のディテール(詳細)は現状ではわからない。	甲B32同一雑誌だが異なる論文
43	断層モデルの高度化に関する検討	独立行政法人原子力安全基盤機構	平19・4	写し		地震		強振動予測レシピとして、入倉孝次郎氏の入倉レシピを説明している。	

甲B 号証	表題	作成者	発行年月	原本/写 しの別	頁	項目	立証要旨	立証趣旨	備考
44	『科学』平成25年4月号 「地震と活断層:その関係を捉え直す」	島崎邦彦	平25・4	写し		地震		活断層の地表での長さから、将来発生する地震のマグニチュードの推定をするという従来の方法は、近年の事例により必ずしも成り立たないこと()。	
45	『科学』平成24年8月号 「電力会社の「虜」だった原発耐震指針改訂の委員たち」	石橋克彦	平24・8・1	写し		地震		耐震設計の基準地震動について、新指針での「震源を特定せずに策定する地震動」は、「震源と活断層を関連つけることが困難な過去の内陸地核内の地震について得られた震源近傍における観測記録を収集し、これらを基に(中略)基準地震動Ssを策定することとする」とされている。電力会社側の日本電気協会が示した加藤ほかの応答スペクトルでは、M7級地震の強い地震記録をすべて活断層と関連付けられる、として参照から排除し、M6.6までの地震の揺れしか用いていない。	
46	地震学の今を問う			写し	1	地震		日本地震学会は、東北地方太平洋沖地震の発生を受け、今までの学説や議論が根本的に間違っていたこと、並びにこれによって国民の生命・身体・財産に膨大な損害をもたらしてしまったことを正面から認め、東北地方太平洋沖地震の翌年(2012年)の定期大会の期間を延長し、「地震学の今を問う」と題する特別シンポジウムを開催した事実。そのシンポジウムは、「日本地震学会の再生の第一歩を記したものとなる」との強い反省に立ったものであったこと。	
					9			東北大学大学院理学研究科地震・噴火予知研究観測センター松澤暢教授が、「現在の建議に基づく地震予知研究においては、アスペリティ・モデルの進展により、プレート境界型地震についてはある程度の長期予測は可能になったと考えられていた。しかし、今回の地震については長期予測はおろかポテンシャル評価すら完全に間違えていた。それはアスペリティ・モデルにおいて以下の問題があったためと考えられる。」と語った事実。	
					14			地震学の概念定義について、例えばアスペリティ、プレートという基本概念すら曖昧な概念であること。	

甲B 号証	表題	作成者	発行年月	原本/写 しの別	頁	項目	立証要旨	立証趣旨	備考
47	日本地震学会ニュースレター Vol. 25, No. 3 浜田信生 「原発の基準地震動と超過確率」	公益社団法人日本 地震学会	25.9.10	写し	23-26	地震		「超過確率」は、 $10^{-4}$ ～ $10^{-6}$ 、とされており、少なくとも1万年に1度という頻度となるが、実際には、この10年間に4度(①2005年8月宮城県沖地震(Mj7. 2)における女川原発、②2007年3月能登半島地震(Mj6. 9)における志賀原発、③2007年7月新潟県中越沖地震における柏崎刈羽原発、④2011年3月東北地方太平洋沖地震における女川原発と福島第一原発)も、基準地震動を上回る地震が発生していること。	
48	日本地震学会ニュースレター Vol. 25, No. 4 信州大学工学部 泉谷恭男 「浜田信生「原発の基準地震動と超過確率」に関連して考えたこと」	公益社団法人日本 地震学会	25.11.10	写し	19-21	地震		基準地震動を上回る地震が1万年に1度という根拠について、実際に現代科学的手法をもって1万年の間、当該敷地が観察されてきたわけではないこと。一定期間(ex 10年間)の観測結果を基に予測された数値であり、その予測のために地震動強度に関する分布関数(確率密度関数)が使用されるが、使用する分布関数を決定するにあたっては、本来できるだけ多くのデータを集める必要があるところ、地震記録は限られているため、乏しい数のデータで分布関数を決定していること。この分布関数の選び方によって予測結果が変わってくるが、元々の選び方が十分なデータに基づくものでないため、予測結果が不正確となってしまうこと。 「1万年に1度」などという極端な値を予測する場合、分布関数の中央ではなく、端に位置する部分が使われることになるが、この端の部分というのは、信頼性が極めて低い部分であること。	
49	朝日新聞 平成26年1月29日 朝刊16面 「発展途上の地震学 背伸びせず社会貢献を」	朝日新聞社	26.1.29	写し		地震		地震学はまだまだ発展途上の学問であり、物理や化学のように不変で明確な法則で成り立つわけでもなく、確立した予測理論もなく、「わかっていないことを整理できるほど進んでいない」と指摘される現状であること。	